

第3章 キリシタンの史跡を訪問して

陳 暁傑

2011年7月28日、わたくしは関西大学文化交渉学専攻後期課程の学生として天草のキリシタン史跡調査に参加した。本稿では調査の史跡巡見について報告したい。

一、崎津天主堂

天草市河浦町崎津にある崎津天主堂を見学した。いま我々が見る教会は昭和9年（1934年）にハルプ神父によって建立されたもの（写真1）である。崎津のキリスト教の歴史は随分前に遡って、永禄12年（1569年）に当地の支配者だった天草氏の招きで訪れたアルメイダ（イエズス会宣教師）に始まると言われる。ここを拠点にして、天草のキリスト教は栄えたのである。しかし、寛永15年（1638年）の禁教令によって、天草には激しい迫害が遭ったのも事実である。公然と信仰することを禁じられたキリスト教徒は、「隠れキリシタン」になる。長い時代を経て、明治5年（1872年）にキリシタン禁制が廃止されて、キリシタンがようやく解放された。近代になってから設けられたのがこの崎津天主堂である。外見



写真1 崎津天主堂（筆者撮影）

からして、小さな漁村にそびえ立つ端麗なゴシック様式の姿は天草を代表するエキゾチズムだ。そして、当地の住民によれば、いま崎津には400名ぐらいのキリスト教信者があり、天主堂は彼らの祈りの家として、日常的に利用されているようである。

二、大江天主堂

その後、我々は天草市大江地区に移動した。この地は、かつて崎津や今富などともに、天草島原の乱で全滅したと思われていたキリシタンが160年余りを経て多数発見された（「天草崩れ」）かくれキリシタンの里である。キリシタン解禁後、道田嘉江らにより、この地に天主堂（旧大江天主堂）が建てられ、キリシタン復活の中心地となった。明治25年（1892年）、ガルニエ神父が天草に来て、49年間大江教会の主任司祭をつとめた（最初の35年間は崎津教会を兼任）。現在我々が見学する建築物は、昭和8年（1933年）、ガルニエ神父が私財を投入して、当時の信者たちと力をあわせて完成したローマ・カトリック教会である。その施工を担当したのは教会建築で有名な鉄川与助氏であり、その様式も典型的ロマネスク様式と見られる。そのガルニエ神父は来日後、一度も故国フランスの土を踏むことなく、昭和16年（1941年）になくなって、かつ当時の貧しい人、社会的弱者たちの友人として多くの人の敬慕を受けた。

明治40年（1907年）8月、東京新詩社を創立した与謝野寛とともに、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、平野万里の五人の若い詩人がガルニエ神父を訪れた。この紀行は東京二六新聞に「五足の靴」と題して発表された（のち五人づれ編で岩波文庫で刊行）。本作品の筆者のうち、北原白秋は詩集『邪宗門』、木下杢太郎は戯曲『南蛮寺門前』と、紀行を通じて得た着想から作品を発表した。また本作品の発表を機に、広く明治末年～大正期の文壇に「南蛮趣味」の流行をもたらした。芥川龍之介のキリシタンをテー



写真2 ガルニエ神父像（大江天主堂近く、筆者撮影）



写真3 「五足の靴」記念碑（筆者撮影）



写真4 大江天主堂（亀井拓撮影）

マにした作品群¹⁾もその一例である。それまでの専門的な研究者を越えた幅広い層に「南蛮文化」「キリシタン」を日本の重要な文化遺産として「再発見」させる契機となったという意味で、本作品が後世に果たした役割は大きいといえる。

ここで天主堂の内部を少し紹介させていただきたい。聖堂正面中央に掲げられた「お告げ（受胎告知）の絵は、言うまでもなく大天使ガブリエルがマリアのもとにつかわされ、神の母となる恵を受けたこと

1) 周知のように、芥川龍之介とキリスト教は切っても切れない関係にある。彼は自殺する時に枕頭に聖書を置いていた。そして、彼の作品に、どの小説がキリシタンの影があるかは研究者により異なるが、有名なのは、たとえば『煙草と悪魔』、『邪宗門』、『黒衣聖母』などを列挙することができる。

を告げる、聖書の出来事である。それはガルニエ神父の姪であるソフィー・ルイス・ガルニエ氏の作品であって、大江教会に寄贈されたものである。そして右の聖像は聖フランシスコ・ザビエル氏であり、1549年日本へ福音を伝えた人である。左の聖像の2人は長崎で殉教した日本二十六聖人のなかのに含まれる、聖パウロ三木と聖ルドビコ茨木である。

その後、我々はふもとに戻って、天草ロザリオ館を見学した。館内には天草キリシタンに関わる貴重な品が集められている。ここで全てを踏まえる余裕はないが、重要な4点を紹介したい。

三、天草市立天草ロザリオ館

1、フランシスコ・デ・ザビエル (1506-1552)

ザビエルはスペイン・ナバラ生まれのカトリック教会の宣教師であって、イエズス会の創設メンバーの1人である。ポルトガル王ジョアン3世の依頼でインドのゴアに派遣され、その後、1549年に日本に初めてキリスト教を伝えたとして有名人になる²⁾。また、日本やインドなどで宣教を行い、聖パウロを超えるほど多くの人々をキリスト教信仰に導いたと言われる。

ザビエルは日本人の資質を高く評価し、「今まで出会った異教徒の中でもっとも優れた国民」であると



写真5 フランシスコ・デ・ザビエル像

2) ザビエルに関する先行研究はたくさんある。管見によれば、たとえば尾原悟『ザビエル』（清水書院、1998年）、岸野久『西洋人の日本発見 ザビエル来日前日本情報の研究』（吉川弘文館、1989年）、岸野久『ザビエルと日本 キリシタン開教期の研究』（吉川弘文館、1998年）、『東洋の使徒』ザビエル』（上智大学、1999年）、ピーター・ミルワード／松本たま訳『ザビエルの見た日本』（講談社、1998年）など。

みた。特に名誉心、貧困を恥としないことを褒め、優れたキリスト教徒になりうる資質が十分ある人々だと考えた。

ちなみに、日本の布教は困難をきわめた。初期には通訳を務めたヤジロウのキリスト教知識のなさから、キリスト教の神を「大日」と訳して「大日を信じなさい」と説いたため、仏教の一派と勘違いされ、僧侶に歓待されたこともあった。ザビエルは間違いに気がついて、「大日」の語をやめ、「デウス」というラテン語を用いるようになった。以後、キリシタンの中でキリスト教の神は「デウス」と呼ばれることになる。

2、マリア観音

マリア観音とは、豊臣秀吉のバテレン追放令や江戸時代のキリシタン禁止令で弾圧を受けた者達によって礼拝対象とされた聖母マリアに擬せられた観音菩薩像である。その多くは中国製の青磁、あるいは白磁の慈母観音像であった。慈母観音とは中国発祥の観音菩薩像で、稚児を抱き慈愛に満ちた造形表現となる。中には菩薩像の胸に十字架を彫刻したり、国内で窯焼きされたものもあったと考えられる。もっとも、外見の「観音」と内面の「マリア」を接続し、「マリア観音」を作り出すことは隠れキリシタンの知恵とはいえ、その真相を幕府の官吏たちはようやく気付いて、大量の信徒は仏教ではないものを祀ったことが明らかになった。沈薇薇氏のマリア信仰における研究によって、「日本における聖母像の変容の特徴といえば、禁教時代のキリシタンが信仰を偽装するため、あえて聖母を他宗教の仏像と融合した習合仏として祀られたことである……舶来品として日本に伝来して以降、禁教時期の隠れキリシタンにとって、救済と慈しみの感情が溢れる観音像の造形はマリアのイメージを仿佛とさせるため、観音像を



写真6 マリア観音（2010年7月ICIS調査撮影、苓北町郷土資料館所蔵資料）

マリア信仰と融合し、習合仏になったと思われる。」³⁾と考察されている。まことにその通りである。

3、経消の壺

幕府の弾圧によって、かくれキリシタンとなった人々は、「死んだら自分たちは神になり天国へ上がる。仏教徒は死んだら仏になると同じように、自分たちは神になる⁴⁾」とした。そういう考え方はキリスト教の正統とは大きな違いがあるとは言うまでもない。というのは、一神教には、信者たちはどころか、主神以外の神を認めることは全て異端として排除されるからである。とにかく、キリシタンはこれを意識して、葬式のなかに具体的な例として現れたのが、このツボを使った経消しの方法である。

キリシタンは、死者を仏教徒として葬ることを最も嫌うものの、その定めに従い、仏式に執り行うことを拒否することは自分の信仰を明らかにするにほかならない。したがって、仏僧の読経を受けた後、いわゆる「死んでも死にきれない」隣の部屋で隠れの指導者が僧のお経に合わせ、経消しのオラショ（祈り言葉）を唱えた。現在の「聖マリアの連祷」が基本と言われるが、ラテン語（oratio）による転訛したものを唱えており、口伝を繰り返した後は意味不明の呪文のように変化した⁵⁾。

長々としてオラショを唱えながら僧の読経をこのツボに封じ込め、さらにクルスをツボの中に入れ入れて仏教の功德を消去するという伝承がこのツボのことである。

4、踏絵

天草で踏み絵が行われたのは天草・島原の乱後で、寛永18年（1641年）、鈴木重成代官の支配から正式に制度化された。踏絵は、キリシタン探索のために用いられた聖画像で、キリシタンが信仰の対象として尊ぶ十字架や、キリスト、聖母マリアの画像を踏ませる行為を「絵踏」または「踏絵」と言う。

最初は、紙に描かれたものを踏ませたが、紙は破れるので、板踏絵による絵踏が制度として長崎で実施されるようになり、これは寛永6年（1629年）から始まったという見方もある。踏絵は毎年1月下旬から3月にかけて、武士、神官、僧侶を除き、庄屋を始めとする村人に義務付けられた年中行事であり、天草では富岡を振り出しに東周りで島を一巡して行われた。踏絵役人は、天草の兼帯支配をしていた島原藩や、富岡代官所から下級役人数名が巡検し、各村では村役の庄屋、年寄りなども立ち会って行われる。

表面上は仏教徒を装っていたかくれキリシタンは、踏絵を行った後に痛恨の祈りして、あるいは聖像を踏んだ足を水で洗い、その水を飲んで罪の許しを乞うたという話もある。一方、関係のない者にとっ

3) 「マリア観音と天草の隠れキリシタン信仰——サンタ・マリア館所蔵資料を中心に」(『天草諸島の文化交渉学研究』所収、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2011年3月、42頁)による。

4) これはおそらく日本の一番流行っている浄土宗と関わる。浄土系仏教によれば、信者は死後に西方極楽浄土へと往生し成仏すると信じる。

5) また、メダイやロザリオ、聖像聖画、クルス（十字架）などの聖具を秘蔵し、生まれる子に洗礼を授けるなどして信仰を守った。幕末の開国、更には明治政府のキリスト教解禁後、こうしたキリシタンの多くは再宣教の為に来日したパリ外国宣教会によってカトリックに復帰したが、長崎県などには、今でも復帰せず土俗化した信仰を保有しているキリシタンも存在すると言われる。

て、その日は良い着物を着せられ皆が集まるので、一種の祭りのようだった。このような状況で、信徒発見の実績は上がらず幕末を迎えるのである。踏絵が廃止になったのは村々で異なるが、大江組下では慶応2年（1866年）に終わった。

感想：

現代日本において、キリスト教式の結婚式を挙げる人も多い。しかし、キリスト教を本当に「信じる」人はというと、きわめて少ない。キリスト教徒は日本では1%程度である。しかも、主体的な態度（好む・嫌い）を持たないこともあるらしい⁶⁾。これに比べると、江戸時代に天草のキリシタン信徒は、たとえその信仰は正統から見れば「不純粹」もしくは「異端」であれ、民間信仰との習合や現世利益の追求も混合であれ、少なくとも、幕府の残酷な迫害があっても諦めない精神があった。この気持ちや信念は現代の我々にとっても学ぶべき意義がある。

6) 以上は主に黒住真『複数性の日本思想』（ペリかん社、2006年）、136頁による。

